

第4章 再発防止の取組

1 再発防止に向けた取組（高等学校編）

生徒の自主的な活動により問題の解決を進める前提として、その集団において規律が守られている、生徒一人一人が尊重されている、教師の働きかけに生徒が反応しているなど、集団として機能しているかという点が重要になる。その前提がなければ生徒自身が「正義」に基づいてアクションを起こすことは難しい。そのために

- 平素から教育活動全体を通じて心の教育の充実を図ること。
- その上で、いじめは人権に関わる問題であるという観点から規範意識の醸成を図ること。
- いじめられた生徒や、いじめがあることを告げたことによりいじめられる恐れがある生徒については、徹底して守り通す態度を示すこと。

などは事前に行っておく必要がある。

それでもいじめ事案が発生した場合は、適切な措置を講ずるとともに、以下の点をポイントにその集団に働きかけて生徒の自主的な問題解決行動を引き出すことが、再発防止に向けての大きな力となる。

1 いじめ認知後の集団への働きかけの例

- ①事実の冷静な受け止めや自らの行動の反省を促し、事実確認の中から「気づき、学ぶ」方向に導くことで前向きに今後を考えさせる。
- ②生徒集団が前向きになったタイミングで、何かしら今後の「目標」を設定させる。
…いじめ案件が発生した場合は、上記のように「失敗から学ぶ」という視点のもとに、同じことを繰り返さないためにきちんと向き合わせ、当事者も周囲の生徒も含めて目標を設定し、達成させることで自信を回復させることが肝要。
- ③期間を定めて、自己や集団の状況や目標の達成状況を振り返らせる。
- ④ある程度、集団として本来の姿に近づいてきたタイミングで、責任をもたせる。

二 事例1 部活動内でのいじめを克服した事例 二

ある高等学校の野球部において、2年生でエースだったAを中心とする数名が、同じ学年の控え選手Bを日常的に“パシリ”として扱ったり、「態度が生意気だ」という理由から直接に暴言を浴びせたりするなどのいじめ事案が発生し、Bは部活動に参加することができなくなった。また、チームも春季大会への参加を辞退せざるをえなくなった。

その後、平素から選手間のミーティングを指導してきた顧問は、まず3年生を集めて「いじめの反省だけでなく、前向きに今後の野球部の目標を話そう」と働きかけた。やがて、キャプテンCを中心に3年生の選手のみで自主的にミーティングが行われるようになった。そこでは、自分たち3年生が後輩を指導できなかった反省とともに、春季大会に出場できなかった悔しさから、より一層結束を深めて最後の大会では必ず上位進出しようという決意が生まれた。

また3年生のみのミーティングでは、このままでは自分たちの引退後には部員が減少して野球部の存続が危ぶまれるのではないかという話題にもなり、やがて、Cの呼びかけで下級生もその話合いに加わるようになった。そして、前向きなミーティングが繰り返されるようになったタイミングで、顧問は、いじめ事案の中心であったAを話合いに加えることを提案した。最終的にはAも含めて「2度といじめはしない。」ということを確認し、再びBを野球部に迎え入れることができた。

＝ 事例2 学級内のいじめを部活動の仲間が救った事例 ＝

ある高等学校で、口数の少ない2年生の女子生徒Dが学級内で男子生徒数名のいじめの標的となり、SNS上で継続的に悪口を書かれるという事案が発生した。やがては直接悪口を言われるまでに発展し、Dは教室に入れなくなってしまった。特に、Dには親しい友人が学級には少なく、いじめに加担しなかった生徒も含めて「怖い」と思うようになっていた。

Dは女子バレー部に所属していたため、女子バレー部の顧問は、部活動がDの支えになると考え、キャプテンのEをはじめ他の部員と話し合いをもった。女子バレー部内では、顧問が日頃から仲間の大切さを説いていたため団結力も強く、選手はDを支えることを快諾し、Dの担任に「教室に入れない間も放課後の部活動にはDを参加させてほしい」という旨の提案をした。

Dも、しばらくは放課後に登校して部活動のみ参加していたが、Eを中心としたバレー部員の支えから自信を取り戻し、少しずつ授業に参加できるようになった。

3年になってからも、Dはバレー部に居場所があることが強い心の支えになっていると担任に話していた。また、Eらも、顧問の働きかけを受けてバレー部引退後もDを支え続けたため、Dは無事卒業することができた。

2 部活動といじめ

高等学校に入ると部活動は活動時間も長くなり、部室など教師や保護者の目の届きにくい場所もあり、時としていじめが起りやすい環境になる場合もある。そこで、以下に示すような部活動の特性を踏まえたいじめを起ささない対応が必要である。

①生徒（部員）同士が非常に密接な関係にある

フォーマル、インフォーマルの区別なく、密接な人間関係になりすぎて軋轢を生む可能性が高まる。また、仲間意識が強いため、容易にいじめの加害者側に加わったり、いじめの実態があっても他者に相談しにくかったりすることもある。

②競争的な関係である

部活動では、いわゆる「レギュラー争い」など、仲間との競争が当然のこととして起こる。本来は仲間との競争が自己を切磋琢磨し、自分をより高めるためのよい環境となるはずであるが、上級生がレギュラーの下級生をいじめるなどの歪んだ行動が生じることもある。また、過度の競争が「競争に勝った者と負けた者」という意識や上下関係をつくることも考えられる。

③目標や結果を共有する関係である

部活動では、部員が目標を共有し、「一人の成功や失敗は、全体の成功や失敗である」と結果も共有することがある。この目標や結果の共有は、より凝集性の高い集団づくりに作用することが期待できるが、「失敗の共有」が過度に強調されると、失敗した生徒に対する批判が生まれ、いじめの引き金となることがある。

④教師の方向性が色濃く反映される

「勝利至上主義」など、部活動顧問の方針や価値観が反映されやすいため、生徒は他者のミスや欠点を受容できなくなったり、存在を否定的にとらえたりするケースが起り得る。

○平素から、教育活動全体において、人権意識や規範意識の醸成など心の教育が重要であり、こうした教育が充実していれば、生徒間でいじめを克服する行動に向かうことが期待できる。

○いじめ事案が発生したことを失敗と捉えるばかりではなく、そこから「気づき、学ぶ」方向に教師が導くことが、再発防止への大きな力となる。